

研究主題 新学習指導要領実施に向けて（1年次） －習得・活用を意図した授業のあり方－

1. はじめに

今日の日本社会は高度情報化、少子化、高齢化、知識基盤社会化、グローバル化など様々な課題を抱えている。その中でも21世紀の教育の大きな課題は知識基盤社会化とグローバル化への対応である。

知識基盤社会とは、新しい知識・情報・技術が政治・経済・産業・文化など社会のあらゆる分野の基盤として飛躍的に重要性を増す社会である。新しい知識・情報・技術は日々進歩し、技術革新が絶え間なく続き、国際的に活用されている。

グローバル化は、国内では構造転換を促し、国際競争を加速させている。一方で、国際間の協力や共存の必要性が一層高まっている。このような中で「生きる力」の育成が益々重要になってきていると中教審で指摘されている。

生きる力とは「自分で課題を見つけ、自ら学び、自ら考え、主体的に判断し、行動し、よりよく問題を解決する資質や能力、自らを律しつつ、他人とともに協調し、他人を思いやる心や感動する心など、豊かな人間性、たくましく生きるための健康や体力等」と平成8年7月の中央教育審議会答申で説明されている。

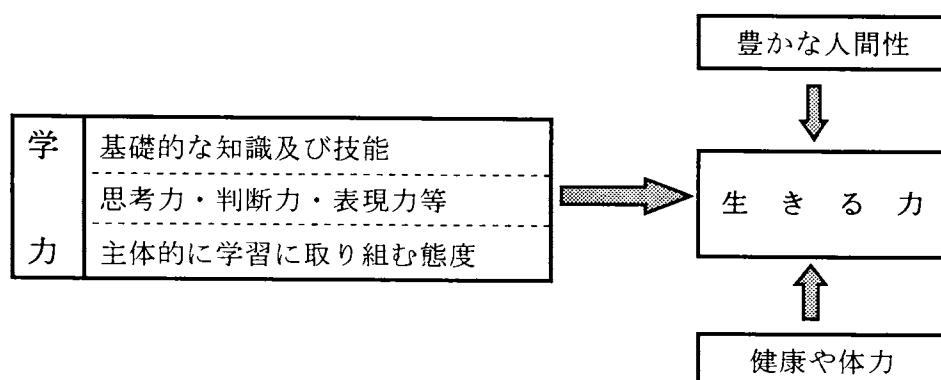
しかし、OECDのPISA調査等から、日本の児童生徒は、「思考力・判断力・表現力等を問う読解力や記述式問題、知識・技能を活用する問題」等に課題があることが明らかになってきた。

また、平成19年に改正された学校教育法第30条では「生涯にわたり学習する基盤が培われるよう、基礎的な知識及び技能を習得させるとともに、これらを活用して課題を解決するために必要な思考力・判断力・表現力その他の能力をはぐくみ、主体的に学習に取り組む態度を養うことに、特に意を用いなければならない」と規定している。つまり、学力を次の3つの点から規定していると考えられる。

- ①基礎的な知識及び技能
- ②知識及び技能を活用して課題を解決するために必要な思考力・判断力・表現力等の能力
- ③主体的に学習に取り組む態度

これらの考え方は平成20年1月の中教審答申の中でも「生きる力」という理念の共有と共に、次のように示されている。この学力は生きる力の基盤となっていると考えられる。

- ①基礎的・基本的な知識・技能の習得
- ②思考力・判断力・表現力等の育成
- ③学習意欲の向上や学習習慣の確立



更に、活用という考え方がOECDの提唱するキーコンピテンシーの中にも「社会的・文化的・技術的なツールを相互作用的に活用する力」として掲げられ、これからの国際社会にとって重要なこととしている。

これらを受けて新学習指導要領改訂の基本方針の中では「確かな学力を育成するためには、基礎的・基本的な知識・技能を確実に習得させること、これらを活用して課題を解決するために必要な思考力・判断力・表現力その他の能力をはぐくむことの双方が重要であり、これらのバランスを重視する必要がある。このため、各教科において基礎的・基本的な知識・技能の習得を重視するとともに、観察・実験やレポートの作成、論述など知識・技能の活用を図る学習活動を充実すること」と述べられているように知識・技能の習得とこれらを活用することの2つが大切であると指摘している。また、活用力という考えではなく、育成すべき能力は思考力・判断力・表現力である。知識・技能の活用を図る学習活動というように、活用は学習活動と位置づけている。また、知識・技能の習得も学習活動を通して培われるものである。

この意味では、教師は普段の授業で知識・技能を習得する学習活動と知識・技能の活用を図る学習活動を意図的に指導していかなければならない。

また、全国学力・学習調査の知識に関する調査と活用に関する調査からも「B問題（活用）の正答数が多い生徒はA問題（知識）の正答数も多い。A問題（知識）の正答数が多い生徒はB問題（活用）の正答数において広く分布している。」という結果がでていいる。これは知識・技能の習得と活用には深い関係があり、習得・活用の両面の指導が大切であることを示している。

そこで、本校では研究副題を「習得と活用を意図した授業のあり方」と設定した。本年度は研究1年目なので、教科指導に焦点を絞って、知識・技能の習得を促す授業と知識・技能を活用して思考力・判断力・表現力を育成する授業のあり方を追求していくこととした。ただ、総合的な学習における探究活動が必要であることは言うまでもない。

2. 研究の進め方

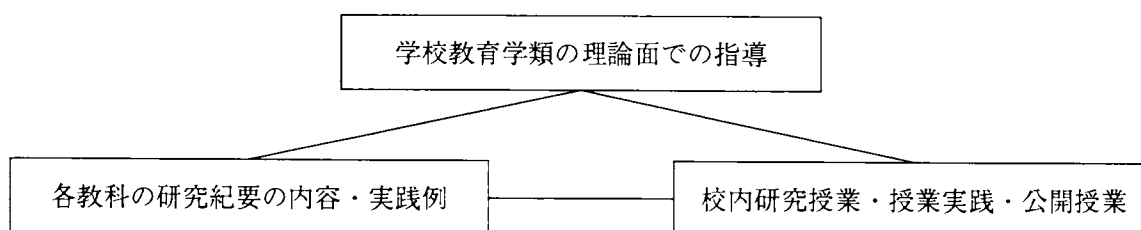
これまでの本校の様々な研究実践から同じ基礎的・基本的な知識・技能の習得や基礎的・基本的な知識・技能の活用と言っても各教科の特性が大きく関係すると考えた。そこで、金沢大学人間社会学域学校教育学類の先生方にこれらの理論的背景についてご指導とご協力を受けながら共同研究として進めることとした。

特に研究実践を進める上で次のような点について考察して頂き、協議し金沢大学附属中学校として「習得・活用を意図した授業のあり方」を考え教材開発や授業実践を進めた。

- ①各教科の基礎的・基本的な知識・技能とは何か。
- ②各教科における基礎的・基本的な知識・技能を活用するとはどのような意味や内容か。
- ③各教科で重視する思考力・判断力・表現力とは何か。
- ④そのための習得・活用の授業はどのようにあればよいか。

詳細は各教科の講演会や分科会にて提案します。(研究紀要の講演会内容要旨を参考にしてください。)

共同研究の関連図



3. 習得と活用について

習得・活用といっても何も新しいことばかりではない。これまでの授業実践の中に習得や活用を進めてきている例が数多くある。それらを習得・活用という観点から見直して授業を再構成していくことも大切である。

知識・技能の習得と言えば反復学習を行ったり、ドリルを行うことで身につく場合もある。また、既習事項を活用して新しい知識・技能を習得することもある。更に、学習した知識・技能を活用して課題を解決することで一層知識・技能の習得が深まることもある。その知識・技能によってはその時間で習得したことがある程度判断できるものや活用してみないと習得したかどうか分からないものもある。

このように、習得と活用の学習活動は一方向だけでなく知識・技能の習得を図る学習活動が知識・技能の活用を促したり、逆に知識・技能の活用を図る学習活動が知識・技能の習得を促進する場合も考えられる。更に、毎時間の授業場面では習得が中心となる授業、習得した知識・技能を活用する授業、活用が中心となる授業、活用しながら習得を深める授業等が考えられる。また、単に1時間の授業だけでなく単元を通じて活用を図る授業、学期、年間を通じて活用を図る授業も考えられる。このように、様々な学習面で習得・活用を柔軟にとらえて、生徒の基礎的・基本的な知識・技能の定着や思考力・判断力・表現力の育成を図っていかなければならない。

実際の知識・技能等習得・活用する学習活動の例としては次のようなものが考えられるが、各教科の具体的な研究実践例は研究紀要の各教科のページや公開授業などを参照していただきたい。

① 習得が中心となる学習活動の例

- ・国語科 —— 漢字練習を繰り返し行なう学習活動・詩歌を鑑賞し、表現方法について知る学習活動や古文の特徴について知る学習活動
- ・社会科 —— 「世界各地の人々の生活と環境」について授業で学び、その後の小テストやその答え合わせの活動を通して、地形・気候などの自然条件への人々の働きかけやそれから影響を受けて生活しているという基礎的・基本的概念を習得する学習活動
- ・数学科 —— 式の計算の方法や方程式の解き方などの技能を原理・法則の理解をもとに習得する学習活動
- ・保健体育科 —— 球技・陸上・水泳・武道・器械体操などの基本技能のドリル活動

② 習得したことを活用する学習活動の例

- ・数学科 —— 図形の性質を既習事項を用いて証明した後に、証明した事柄を活用して新しい性質を見つける学習活動
- ・理科 —— 砂糖、かたくり粉、食塩が燃焼するときの特徴を見いだした後、名前の分からない白色粉末が何であるか調べる学習活動や雲のでき方や、雲が発生する気象状況などを学習し、実際に天気の変化を予測する学習活動

- ・英語科 —— Quick Q & A (決まった質問に対してQuick Responseでパートナーが答える)やインフォメーションギャップなどの学習活動
- ・保健体育科 —— 球技・陸上・水泳・武道・器械体操などの身につけた基本技能を意図的に利用した集団技能練習活動

③ 活用が中心となる学習活動の例

- ・国語科 —— 詩歌を創作する学習活動や古文を読んで現代語に訳する学習活動
- ・理科 —— 単元「動物のくらしとなかま」の学習終了後、「身体と健康」というテーマでレポートを作成し発表する学習活動
- ・英語科 —— Small Talk (2人である話題について、2～3分くらい、フリートークを行う)、小説(リーダーズなど)を読むこと、教科書の文にストーリーを足して英語で書くこと、英語でまとまった文章を書くことなどの学習活動

④ 活用しながら習得する学習活動

- ・国語科 —— 創作した詩歌を鑑賞しあう学習活動や教科書以外の古典作品を読む学習活動
- ・社会科 —— 「世界各地の人々の生活と環境」「世界の諸地域」について授業で学び、「世界の様々な地域の調査」レポート作成活動を通して、世界の地形・気候などの自然条件への人々の働きかけやそれから影響を受けて生活していること、環境問題、交通網整備による経済効果などの基礎的・基本的概念を習得する学習活動
- ・数学科 —— 三角形の内角の和が 180° になることを平行線の性質を用いて証明することで、証明の方法や推論について習得していく学習活動

4. 各教科の習得・活用に対する考え方の要旨

教科	各教科の習得・活用について
国語	新学習指導要領の各学年「2内容」の「A話すこと・聞くこと」「B書くこと」「C読むこと」それぞれの(1)「……の能力を育成するため、次の事項について指導する」に記載されたいわゆる「指導事項」の内容が「習得」すべき基礎的・基本的事項に相当し、(2)の言語活動例が思考力・判断力・表現力等を育成するための(1)の「活用」例であるととらえた。
社会	基礎的・基本的な知識、概念、技能とは何かについて明確にし、小テスト、カルタ取り、レポート作成などを通して生徒に定着・蓄積させることを意識する。例えばレポート作成過程において、生徒が学んだ基礎的・基本的な知識、概念、技能を活用することによって、基礎的・基本的な知識、概念、技能を生徒の中に定着・蓄積することを目指して、教師はレポートに対して行うアドバイスする項目を事前にあげておく。
数学	既習の数学を活用して、新たな数や図形知識や概念、法則の理解を深め、数学的な表現や処理の仕方を習得する。数や図形の性質を説明・証明を活用して新たな性質や関係を見つれたり読み取ったりする。日常生活等の事象について数学を活用して問題を解決する。

教 科	各教科の習得・活用について
理 科	<p>基本的概念を理解させていくことが学習を深めていくうえで大切になることから、指導事項と併せて定着を図る必要がある。これらの既習の知識や考え方をういて実験方法を考える、考察するなどの、これまでの理科の授業でも大切にされてきた活動も活用の場であると考え。さらに、実生活と関連付けて考える発展的な探究活動の場を設けるなどして、学習したことの有用性を感じるようにする。</p>
音 楽	<p>音楽科における習得・活用とは、楽譜を読む上での知識や歌唱・器楽といった演奏をする際の技能を身につけ、それらを表現活動に活かすことだと考える。しかし、習得したものを1時間の授業の中ですぐに活用するということが難しい面もあるので、1,2年後に活用できるということも視野に入れている。</p>
美 術	<p>美術科の学習活動には表現、鑑賞の2つの活動の柱があるが、いずれの活動においても、感じ、考え、選び、決定するといった「思考」「判断」が繰り返されたのち、表現活動においては作品（視覚化）などの形で、鑑賞活動においては感想（言語化）などの形で「表現」される。当然その活動を通して子どもたちはそれまでに身につけてきた知識・技能を「活用」している。さらに、子どもたちのよりよい活動の実現には新たな知識・技能が必要であり、それを追求、学習し、「習得」する活動も随時行われている。教師の役割は、子供たちの学習活動における活用の場面を支援し、必要とされる知識・技能の習得に応じた教授を行うことだと考える。</p>
保健体育	<p>保健体育科における「習得」とは、「知識」「技能」の習得があげられる。知識を「知る」、そのために「習う」、習ったことを「身につける」という流れを基に、保健体育科での習得場面ではまず「分かる」、そして「できる」ということを基本的な形とし、学習を進める。そして活用場面では、これまで学んだ知識や技能、または類似した動きなどを組み合わせ応用し、新たな知識や技能そして新たな課題へと結びつけていく。</p>
技術・家庭 (家庭分野)	<p>家庭分野において習得すべき内容とは、各題材ごとの知識・概念や技能である。基礎基本である知識や概念を年間を通して繰り返し学習し定着させると同時に、各実習などへの関連性をもたせることを基礎としたい。またそれらの知識・技術をもとに生活の諸課題を捉え直すことを活用と考える。その上で生徒自身が各自の生活の課題にたいしていかにかまっていけるか、その探究を最終的な活用と考える。</p>
英 語	<p>習得とは授業において語彙、文法事項などのさまざまな知識を学び、繰り返しによりその学習内容を定着させていくことである。活用とは、さまざまな言語活動を行う際に、既習の基礎・基本的な事項を用いて、場面・心情などに合うように考えながら表現することである。</p>

5. 成果と課題

* 成果

- ① 各教科における習得・活用を意図した授業のあり方について金沢大学人間社会学域学校教育学類の指導をもとに教科研究の理論面をふまえた研究実践を行うことができ、一定の方向で研究実践を進めることができた。
- ② 各教科で知識・技能の習得・活用をどのようにとらえるかやそのための授業のあり方、各教科に必要な思考力・判断力・表現力の育成のあり方を追求することができた。
- ③ これまでの教科指導を習得・活用という視点で見直し、意図的に研究実践を進めることで、生徒が知識・技能を習得し活用することを明確にした学習活動を促すことができた。

* 課題

- ① 各教科で追求した習得・活用を意図した授業形態を全教科にわたり、学習活動を類型化することを考えてみる。
- ② 文部科学省が例示している思考力・判断力・表現力等を育む学習活動例をいくつかの授業では指導していた。更に、本校の習得・活用を意図した授業との関連を考察しながら研究実践を進める。
- ③ 思考力・判断力・表現力等をはぐくむために必要な「言語活動の充実」という点について、今年度は検討にいたっていない。今後追求していく必要がある。
- ④ 各教科間や総合的な学習の時間での知識・技能の活用や探究については今後、検討する。

* 参考・引用文献

中学校学習指導要領 中学校学習指導要領解説（総則編及び各教科編）

平成8年7月・平成20年1月中央教育審議会答申

平成19年度平成20年度全国学力・学習状況調査「中学校」報告書

研 究 同 人

校 長	諸 岡 康 哉		
副 校 長	坂 口 匠		
教 諭	石 田 明 美 (国 語)	教 諭	鏡 千佳子 (音 楽)
〃	端 名 秀 雄 (国 語)	〃	西 澤 明 (美 術)
〃	清 水 絵 里 奈 (国 語)	〃	志 村 信 幸 (保 体)
〃	寺 田 康 彦 (社 会)	〃	廣 瀬 尋 理 (保 体)
〃	石 田 了 子 (社 会)	〃	橋 本 正 恵 (技・家)
〃	小 山 均 (社 会)	〃	中 村 正 寛 (技・家)
〃	浜 口 国 彦 (数 学)	〃	小 川 正 清 (英 語)
主 幹 教 諭	松 原 敏 治 (数 学)	〃	齊 藤 亜 希 子 (英 語)
教 諭	戸 水 吉 信 (数 学)	〃	端 崎 圭 一 (英 語)
〃	廣 谷 玲 江 (理 科)	養 護 教 諭	沢 田 有 香
〃	岩 田 哲 也 (理 科)		
〃	辰 巳 豊 (理 科)		

共同研究者 (金沢大学人間社会学域学校教育学類)

折 川 司 准教授 (国 語)	奥 田 晴 樹 教授 (社 会)
大 谷 実 教授 (数 学)	松 原 道 男 教授 (理 科)
篠 原 秀 夫 教授 (音 楽)	鷲 山 靖 教授 (美 術)
齊 藤 一 彦 准教授 (保 健 体 育)	綿 引 伴 子 教授 (家 庭)
加 納 幹 雄 教授 (英 語)	久 保 拓 也 准教授 (英 語)